

（スローガン）

力強いステップ、栄光へのジャンプ

まずは、東日本大震災にて被災された多くの方々に心よりお悔みとお見舞いを申し上げます。
一日も早い復興を心より願っております。
さて、こんな時、我々スポーツ界は何をしなければならないのでしょうか。何ができるのでしょうか。

2011 年、今年の 1 月 30 日未明、「サッカー・アジアカップ」に日本中が湧き、サッカーに興奮し、サッカーに感動をしました。日本代表選手たちの活躍は多くの国民に感動と勇気、そして元気を与えてくれたのでした。日本人が日本人であることを誇りに思えた一日でした。我々はスポーツが社会に貢献できることの大きさを知っています。
本年 10 月、「第 43 回世界体操競技選手権」を東京体育館にて開催いたします。その頃には本格的復興を目指している東北地方の皆さんに、そしてニッポンに、我々は、どれだけ多くの勇気と元気を届けることができるのでしょうか。「全てのスポーツの基本は体操である」を信念とする「体操ニッポン」は、日本のスポーツ界をリードし、常に社会に貢献できる存在であるために、自らが率先して変革を求め主体的に活動をして参ります。

（2010 年度・体操ニッポンの反省）

昨年の日本体操界を振り返ってみたいと存じます。

体操競技は、10 月「世界体操・ロッテルダム大会」において、男子は「団体・個人総合・種目別での各金メダル獲得」を目標として大会にのぞみました。結果は、内村航平選手が世界体操史上タイ記録の世界選手権・個人総合 2 連覇に輝きました。若い内村選手の快挙は体操関係者にとどまらず、多くの国民の皆様にも感動と元気を与えることとなりました。しかし団体においては全選手にミスがあり、僅差の 1. 228 で中国に惜敗し、金メダルを取りこぼしました。また、種目別・金メダル獲得の目標も達成できなかったことは大いに反省し、今後課題を残したといえます。

一方女子は、ベテラン選手の引退によるチーム力不足を想定し団体第 8 位入賞を目標としていましたが、何とか一昨年と同位の第 5 位入賞を死守し、「体操ニッポン女子」の世界でのポジショニングを築きつつあるように見受けました。しかし、昨年活躍した鶴見虹子選手に精彩を欠き、個人のメダル獲得を失いましたことは課題として残しましたが、代わりに田中理恵選手が FIG エレガンス賞に輝くなど、日本スポーツ界にとっては明るい話題を提供いたしました。

11 月に中国・広州にて開催されました「第 16 回アジア競技大会」では、男子は団体で銀、種目別・鉄棒で桑原 俊選手が銀、個人総合の水鳥寿思選手が銅の合計 3 個のメダルという残念な結果でしたが、女子は団体で銀、個人総合の田中理恵選手が銅、種目別では田中理恵選手が跳馬で銀、山岸 舞選手がゆかで銀、鶴見虹子選手が段違い平行棒で銅、小沢茂々子選手が跳馬で銅の合計 6 個というアジア競技大会史上最多のメダルを獲得し、日替わりで新聞紙面を体操で飾ることができました。

体操競技は、内村航平選手と田中理恵選手の活躍が大きく注目されることで、国民の皆様のご期待には応えることができましたが、今後に残す課題も多かった一年であったと存じております。

続いて、新体操はメダル獲得の可能性の高い団体に強化を特化し、全国より優秀選手を選抜してチームを結成する「フェアリージャパン POLA」を継続しました。強化拠点を新体操先進国ロシアのサンクトペテルブルグに設置し、コーチもロシアのインナ・ビストロヴァコーチを採用、ヨーロッパでの転戦を行うなどして強豪国に遅れを取らない強化を行いました。また、低迷が続いている個人につきましては、「26 点を獲得できない選手は海外に派遣しない」という世界標準得点制度の厳しい方針を導入し、団体 6 位入賞、個人総合 15 位を目標とし、「世界新体操・モスクワ大会」にのぞみました。

結果は、団体は総合6位、種目別は2種目とも6位入賞という高めに設定した目標を達成することができましたが、個人の大貫友梨選手は第19位で、得点も全種目で目標の26点に届かず目標達成には及びませんでした。

11月の「第16回アジア競技大会」では国別対抗で銅メダルを獲得いたしました。

新体操については、団体は着実に実績を積み上げ国民の皆様の期待に応えつつありますが、個人においては将来の展望がみえない現状を一日も早く脱しなければならず危機感をもって取り組む必要性があると認識しております。

トランポリンは11月「世界トランポリン・メス大会」において、男子個人で上山容弘選手が銅メダルを獲得しました。上山選手は2005、2007、2009年の世界選手権大会でもメダルを獲得しており、4大会連続メダル獲得は世界史上初の記録となります。また、男子シンクロでは外村哲也・伊藤正樹組が銅メダルを獲得したものの、前回2大会で優勝していたことを考えると残念な結果ではありました。さらに、世界選手権の翌週に行われた「第16回アジア競技大会」では、外村哲也選手が銅メダル獲得、伊藤正樹選手も僅差で4位につけることができました。いずれの大会でも上位を中国が占めましたが、点差に大差はなくロンドンオリンピックでは充分に金メダルの射程距離内にあると存じています。

また、2010年8月にはシンガポールにて「第1回ユースオリンピック」が開催されました。将来の「体操ニッポン」を占ううえでも非常に重要な大会でした。体操競技では神本雄也選手が初代個人総合金メダリストに輝き、つり輪でも銀メダル、笹田夏実選手が個人総合第4位に入賞いたしました。新体操は団体で第4位、トランポリンは棟朝銀河(むねとも・ぎんが)選手と土井畑知里(どいばた・ちさと)選手が銅メダルを獲得し、「体操ニッポン」の明るい未来を予感させる結果となりました。

振り返ってみれば、2010年度の「体操ニッポン」は何とか面目を保てたものの、今後に残す課題も多かった年だったのではないのでしょうか。2011年度はそれらの課題に真摯に取り組み、来年に迫ったロンドンオリンピックに向けて万全の体制を整えなければならないと存じているところでございます。

(ロンドンオリンピックへ)

そして、いよいよロンドンオリンピックが来年へと迫って参りました。

体操競技は、今年「世界体操 東京2011」を開催いたします。ホームタウンでの開催を背景に好成績が期待されます。男子は団体、個人、種目別での金メダルを含む複数メダル獲得を目標とし、女子も団体、個人、種目別でのメダル獲得を目標とします。男女ともに、「世界体操 東京2011」でロンドンオリンピック出場権を獲得致したいと存じます。

男子につきましては、「体操ニッポン」の伝統である「美しい体操」に加え、難度にも挑戦し「強く、美しい体操」に変革して参ります。先般開催しました日中合同合宿は、世界のトップ選手同士が互いの良いところを勉強しあう画期的な合宿でした。今後も、世界から学ぶべきところは真摯に学び競技力の向上に努めて参りたいと存じます。

女子は、昨年の1月よりスタートした「世界体操 東京2011」までの「22ヶ月間合宿」を継続いたします。ウクライナより招聘しましたバツラ・セルギーコーチとアリーナ・コチジコレオグラファに加え、専属トレーナー、栄養士、JISSから派遣されるロシア語通訳と選手生活フォローマネージャーなどによる練習環境整備を全面的にバックアップして参ります。

新体操は、引き続きメダル獲得の可能性の高い団体に強化を特化します。「フェアリージャパン POLA」の強化拠点はロシアとしグローバル基準での強化を継続します。今年の「世界新体操・モンペリエ大会」では、団体6位入賞、ロンドンオリンピックへの出場権獲得を目標といたします。

個人につきましては、将来の展望が見えない現況を何とかして打破しなければなりません。一番の課題は現場の指導者たちの意識改革です。昨年、強化本部長が設定した世界標準得点制度26点は無謀と評されましたが、結果的には26点では世界選手権10位には入れず、また国内で26点を獲得しても世界では26点に到達しないという国内基準の甘さも露呈しました。女子体操競技は「国内の争い」から「世界との戦い」に照準を変えたことで、飛躍的に世界での順位を上げることに成功しました。新体操も体操競技に見習った指導者たちの抜本的意識改革が必要です。このまま世界10位の壁を越えられない現状では、今後は日本の強化から個人強化を除外することも視野に入れなければなりません。指導者の考え方を刷新し、一刻も早い立て直しをはかります。

トランポリンは11月の「世界トランポリン・バーミンガム大会」で、男子は個人、シンクロ、団体全てにおいてメダルを獲得し、ロンドンオリンピック出場枠を2名分獲得することを目標とします。

女子は団体が決勝に進出できるよう各個人の実力を確実なものにしていくこと、さらの現時点で3点以上の差をつけられている難度差をいかに少なくするかを考えることが大きな課題となります。女子につきましても来年1月のオリンピックテストイベントを待つ事無く、この世界選手権大会で出場枠を獲得することを目標と致したいと存じます。

また、世界選手権では普段使用されていないジムノバ製のトランポリンが使用されることが決定しており、こちらについても世界選手権までに数回の強化合宿を行い、器具の癖を早く把握し本番でも動じることなく好成績を修められるよう対策を講じて参ります。また世界選手権までの7回のワールドカップにおいて、世界ランクを下げないこともロンドンオリンピックへの懸け橋となることは明確ですので、ワールドカップの一戦一戦も慎重に取り組んで参りたいと存じます。

体操競技、新体操、トランポリンと全ての部門において、昨年の大会結果からロンドンオリンピックに向けての課題は明確となっております。それらの課題に積極的に取り組み、今年度の目標を達成し、来年のロンドンオリンピックでの成功を目指して参りたいと存じます。

(組織改革)

今年度は新しい組織体制で協会運営にのぞみます。これまで、競技種目ごとに縦割りされていた組織を機能別、業務内容別に組織再編をいたしました。組織再編の目的は「プロ集団」による組織運営です。

選手強化の機能は新設された「強化本部」に集約しました。「強化本部」は「オリンピック強化部」と「ジュニア強化部」によって構成されます。これまでの各競技委員会内の「ジュニア強化部」を「強化本部」内に再編することにし、選手強化はチャイルドからオリンピック選手まで一貫した強化を実施できる体制を整えました。

指導者育成も「コーチ育成委員会」を新設し、各競技委員会の「指導者育成部」を集約致しました。指導者育成は「教員育成から民間クラブ指導者育成」へと、時代のニーズとともにその手法も変化していかなければなりません。国体の公認スポーツ指導者資格義務付けを機に、指導者育成にも力を注いで参りたいと存じます。

組織改革のもう一つの目的は協会組織内にイノベーションを起こすことです。従来のことを従来と同じように行っていたのでは発展は見込めません。我々は常に「新しい価値」を創造していかなければ、社会における体操の存在価値が問われてしまいます。競技会は「体操選手たちのモノ」から「体操を観なくてもいい人たちが体操を観にくるような大会」に進化させなければなりません。体操を普及するツールは「学校から民間クラブ」に。時代の変化に対応するには、旧態依然とした組織体制では手遅れとなってしまいます。「仲良し組織」から「プロの集団」への変革が唯一生き残っていく手段であると存じています。

(世界体操・東京大会とワールドカップ・東京大会、JAPAN CUP)

そして、いよいよ今年の10月に「第43回世界体操競技選手権・東京大会(世界体操 東京2011)」を開催いたします。「体操ニッポン」は本大会を機に大きく飛躍いたします。昨年度の政策方針でも申し上げましたが、そのために我々がやらなければならないこと、体操がメジャースポーツ化するための重要なポイントは3つあります。

1つ目のポイントは選手の活躍です。どれだけ選手が活躍できるか。どれだけメダルを獲得できるかです。

2つ目のポイントはメディアの活用です。これについては、フジテレビの協力により日本体操界史上初めてのプライムタイムでの放映を確約いただいております。大きくメディアで取り上げられ、体操の認知度は一気にアップいたします。

3つ目のポイント。昨年来、これが最も重要なポイントだと申し上げております。体操愛好者の受入れ体制の整備です。多くの人々が体操に興味を持っていただいた時に、我々体操関係者は、それにどうやって対応するのか。その受入れ体制の整備が急務です。今から体操ブームへの準備を整え、ブームがきた時には、愛好者の受入れ体制が整備されている状況をつくらなければなりません。

この環境整備は、日本の体操界関係者が一丸となって取り組まなければなりません。具体的には各地での「世界体操2011 東京」の告知から始まり、体操クラブや体操スクールの新設、クラブやスクールの存在・認知度向上などです。

体操クラブやスクールの新設は難しいという概念はありませんか。地域の体育館や公民館を利用しての一時的な体操教室。空き事務所を活用した体操教室。これからでも、対応できることはたくさんあります。今からでも、できることは何でもやろうではありませんか。

「世界体操 東京2011」が開催中の10日間は、我々体操人が体操人であることを誇りに感じ、体操の素晴らしさを社会にアピールし、そして体操をメジャースポーツに押し上げる最高のチャンスとして、全ての体操人が所属の関係なく、上下の関係なく、無我夢中で体操をアピールする、そんな10日間にして参りたいと存じます。

また、本年は5月の「全日本体操競技選手権」と6月の「NHK杯体操」はNHKにて、7月の「体操JAPAN CUP2011」はフジテレビにて、そして今年より毎年11月に世界の個人総合トップ8の選手が出場する「体操ワールドカップ東京大会」（放映局未定）を開催することとなりました。選手の活躍とともに、体操をメジャースポーツに推進する仕組みづくりも合わせて取り組んで参ります。

（一般体操の普及）

体操を体験するのに最も入口が広く親しみ易いのは、誰でも楽しめる体操「一般体操」だと存じます。「少子高齢化社会」、「価値観の多様化」が急速に進む中、一般体操が社会で果たす役割は決して小さくありません。

今年是一般体操の世界イベント「第14回世界体操祭」がスイスのローザンヌで開催されます。世界大会では日本が演技する「日本のタベ」が大変な人気です。日本の一般体操は世界で高評価いただいております。この高いレベルを維持、さらに発展させるためにも、全国に一般体操担当者設置、「一般体操指導者」の育成、地域での「体操祭」開催を推進し、引き続き一般体操の普及発展に努めて参りたいと存じます。

そして、多くの体操愛好者及び体操のサポーターは一般体操の領域だと考えております。「誰でも気軽に取り組める健康に直結した運動＝一般体操」は、体操ニッポンの底辺拡大に貢献することだと存じます。全国各地での一般体操の組織化と活性化には地域の皆様のご協力が必要ですので何とぞ宜しくお願い申し上げます。

（男子新体操の普及）

男子新体操の全国登録会員数は現在約1200名です。企業テレビCMや全国ネットのドラマに男子新体操を起用していただきましたが、普及状況は思うように進んでおりません。普及しない理由はどこにあるのか。何が原因なのか。どうすれば良いのか。自らをしっかりと分析し、その存在価値を創造し、生き残っていくために自らを変革していかなければならないことを指導者たちが認識する時期となっています。

今年より「男子新体操委員会」を新設いたしました。委員会においては男子新体操のビジョン、目標設定、戦略、等を検討・提案しながら、今後は地に足をつけた国内の普及対策を一步一步確実に行って参りたいと存じます。

（地域活性化）

我々が目指す「体操ニッポン」のあるべき姿はピラミッド型の愛好者人口です。地域の組織が強化・拡大されることにより、ピラミッドの底辺が拡大し、そのことでより高い極みにトップアスリートを育成できるのだと存じております。

一昨年より、自立した逞しい協会運営を目指して、各都道府県協会・連盟ご推薦の役員を本協会負担にてビジネススクールに派遣し、協会運営関係者にマネジメント能力を培うという人材育成に取り組みを始めました。受講者からは、「受講後はビジネス感覚を持って協会運営に携わることができるようになった」など好評を得ておりますので、本事業を継続し、ビジネス感覚を持ち、地域や日本の体操界の将来を担う人材の育成に取り組んで参ります。

また、昨年度からのWeb登録制度導入の主旨は、各都道府県協会・連盟が登録業務に多大な時間と労力を割いていることの負担を少しでも軽減したいとの思いからでございます。社会のIT化の流れから、いずれは手作業ではなくWeb登録に移行していくものだと思っております。様々な課題はあることと存じますが、前向きな取り組みをお願い申し上げます。

新しく導入されました、「地域活性化成功事例・表彰制度」は、全国代表者会議にて発表・表彰されましたが、これまでにない企画として大変好評を得ました。他の地域がどのような形で普及活動を行っているのか、志を共にする仲間としては大変興味あるものでした。今後も成功事例を全国に発表し、共有化、水平展開することで、地域格差解消の一助に、そしてより多くの地域の活性化につながることを期待しております。

昨年度、「地域協会運営How To BOOK(運営マニュアル)」を制作し、世代交代の時期を迎えつつある各地域協会の運営ノウハウを一冊の本にまとめることを企画いたしました。このことについては、本という書籍でなく協会ホームページに掲出して、積み重ねていこうという方向性を出しております。「こんな時どうすれば良いのだろうか?」、「何か良い手立ては無いかな?」などの協会運営に関するノウハウや成功事例を、ホームページ上でまとめ、「体操ニッポン」が、これまで積み上げてきた知恵を財産に変えて参りたいと存じます。

(むすび)

「世界体操 東京 2011」実行委員会の目標は「世界の感動を与えよう!」です。我々はどれだけ多くの人たちに感動を与えられるのでしょうか。そして、その感動は序章に過ぎず、ロンドンオリンピックでは、さらに多くの国民の皆様に関与をすることができるようにならなければなりません。今や常勝が義務付けられた「体操ニッポン」は何をなすべきなのでしょう。我々は常に「体操ニッポンのあるべき姿」を求め続けて参りました。体操人が体操人であることを誇りに思える、そんな日本の体操界をつくって参りたいと存じております。そのためには勇気をもって改革に挑戦し続けることが、唯一目的を達成する手段であると確信を致しております。

今年は「世界体操 東京 2011」が戦場となります。我々は昨年のスローガン「力強い助走」に続き、今年のスローガンを「力強いステップ、栄光へのジャンプ」といたします。「世界体操 東京 2011」において力強いステップ、「ロンドンオリンピック」での栄光へのジャンプを達成し、東北地方の復興、ニッポンの復興、ニッポンに元気を取り戻したいと存じます。以上、平成 23 年度(財)日本体操協会政策方針を発表いたしました。

皆さん、一緒に頑張りましょう。